

演題 「センサーマットを外してほしい」という思いに応えるための取り組みを通して
学んだこと ～私たちが目指す自立支援～

所属 特別養護老人ホーム やまゆり苑

発表者 介護職 安食 祐依

【はじめに】

センサーマットとは、マットの上に体重が掛ると、職員に知らせる仕組みのマットである。一般的に転倒や徘徊される方に対し、危険防止のために使われていることが多い。転倒についてはセンサーが反応した直後に転倒されるケースもあり、全て防げるわけではない。また、センサーマットがあることで本人の負担になることもある。

今回は、「センサーマットを外してほしい。」と話された利用者の思いを叶えるための環境作りと、その中で見えてきた、センサーマット設置の意味と自立支援について報告する。

【事例紹介】

0さん 80歳代 男性 要介護4 平成21年パーキンソン病と診断された。平成26年転倒され、入院された。退院後、自宅での生活が困難となり、平成27年3月23日やまゆり苑入所となった。転倒防止のためセンサーマットを設置したが、設置することに納得しておられなかった。その後転倒が続き、平成28年10月頃「チカチカ音が鳴るマットは外してほしい」と話された。0さんの思いは、「できることは自分ひとりでしたい」「居室内は自由にさせて欲しい。」と言うものであった。私たちは「センサーマットを外しても、0さんのペースで、安全に自立した生活ができる。」ということを目標に挙げて取り組んだ。

【実践内容】

- ① 生活に必要なものをタンスの上や周りに置くことを好まれ、周辺での動きも多いため、タンスを固定し、タンスの上に手すりを設置した。
- ② トイレ内でのズボンの上げ下げは不安定で、排泄後の陰部のふき取り介助等をお手伝いさせて頂くために、A氏がトイレに行かれたことがわかるように、トイレ内の入口にセンサーマットを設置した。
- ③ 移乗時の転倒リスクを軽減するため、ベッド横に車椅子を置いて、ベッドを一番低い高さにし、衝撃吸収マットを継続した。また、皮膚の損傷予防のため、ベッドのフレームに座布団で保護した。
- ④ 筋力低下防止、パーキンソン病症状を補うため、リビングから居室3～4mの手を引いて歩く訓練を行った。
- ⑤ 転倒時の衝撃を緩和するため、クッションをパンツに縫い付けた。

【成果とまとめ】

0さんは転倒回数が減り、「今の居室の設えは満足しとる」と話された。私たちは、介助無しで0さんが動かれるのは危険であると判断し、センサーマットを使用していたが、「職員に迷惑を掛けたくない」「自由にさせて欲しい」という思いが0さんの無理な行動につながり、それが転倒の危険性を増していたのではないかと推測する。

今回支援した内容は、利用者の思いや選択を尊重することを重視した自立支援の一つであったと考える。この0さんへの自立支援の中で見えてきたことは以下の3点である。

- ① センサーマットは抑制の道具ではなく、動きを把握し、いずれは外すことを目標に設置することで自立支援につながる。
- ② 本人が持つ力を生かして、その人らしく生活するうえでは、各部門の専門職による総合的な支援をしながら、状態に応じた細やかな居室環境作りをすることが有効である。
- ③ 居室環境作りは「考える力を引き出す支援」として、利用者本人の生活する力の回復にもつながる。

居室環境作りは自立支援を行う上で、重要な支援であると学んだ。利用者一人ひとりの生活歴、思い、身体機能、残存機能などを見極め、それに合わせた支援をすることで、施設で暮らす利用者様の生活がより良いものになる。私たちはそんな自立支援を目指していきたい。